

黒松内における音楽療法とコンサート

研修報告

関谷正子・倉橋 健

はじめに

札幌大谷大学音楽学部は北海道の地で音楽を専門とする大学として、伝統と誇りを礎に豊かな学びを提供することにある。技術論的には完成された西洋音楽の技法を習得しつつ、聴衆を前にした音楽活動においては、すべての人々に感動と感銘をあたえることが、本学における音楽家養成の基本理念とし、すぐれた音楽の専門家を育てることを目的としている。その中には、音楽を愛する人すべてに音楽を提供する義務があると考えられる。それを支えるのは、コンサートに足を運んでくれる人々、イベントで聞いてくれる人々、障害を持った人々、子どもたちなどである。今回の黒松内研修は音楽療法を学ぶ学生と管弦打楽器コースの有志によるビッグバンドの学生が参加した。現在、音楽療法は学



問としての位置づけを明確にするため、多くの大学、専門学校のカリキュラムに組み入れられている。そして国家資格になるべく多くの問題を抱えている。本学では、音楽を専門とする学生が音楽療法課程で音楽療法士(民間資格)の資格を目指している。毎年1学年のほぼ20%の学生が音楽療法を学んでいる。これら学生は4年間で15日以上社会福祉施設・病院等での実習が課せられている。この期間、学生たちは音楽は万人に共通する大切な財産であることを、身を持って体験し、今後の音楽活動に生かすことが出来る機会である。黒松内研修は、黒松内町長、教育委員長、つくし園理事長、真宗大谷派開正寺の協力により、黒松内町地域交流として実施に至った。

音楽療法について

松井は音楽療法を次のように定義している。「音楽療法とは、音楽の持つ生理的、心理的、社会的働きを、心身の障害の回復、機能の維持改善、生活の質の向上に向けて、意図的、計画的に活用して行われる治療技法である」。

日本音楽療法学会は約7,000人を会員とし、1997年に認定音楽療法士制度が誕生して以来、国内において音楽療法の実践者の数が急激に増大した。その実態を調査するために、研究者たちは1999年に臨床音楽療法協会の会員695名を対象にアンケート調査(回収率38.4%)を行った。その結果、音楽療法を実践している施設は障害児・者関連施設45.3%に次いで、老人関連施設は34%と高く、高齢者の音楽療法が社会に受け入れられ始めていることを示唆する。そして、音楽療法は音楽が人間に与える影響によって、対象者がより社会的に適応しうる変化の為に音楽を効果的に使用する方法の一つとして存在しているといえよう。音楽療法は子どもから高齢者まで治療介入として、また健康を促進するために用いられている。

音楽療法の実践

シュワーベ(Schwabe, C.H.)は音楽療法のアプローチを、音楽鑑賞を含めて、音楽を聴くことによって情緒・行動の変容を目的とする音楽療法と、歌唱・楽器演奏・創作などを中心とした音楽療法の2種類に大別している。前者を受動的(容)的音楽療法(Receptive Music Therapy)、後者を能動的音楽療法(Active Music Therapy)と呼び、受動的(容)的音楽療法と能動的音楽療法は、音楽療法の中で最も基本的な分類とされている。

歌唱や楽器の演奏・創作が活動の中心におかれ、歌うことや楽器演奏をすることが自己表現に直接つながることが重視される。カラオケの急速な普及に見られるように、歌うことは、日本人にとって愛好される自己表現であり、自信の回復、ストレス発散など豊かな治療性を持っている。また、コーラスや障害児・者、高齢者の集団で行う能動的音楽療法には、個人と音楽の関係を超えて、音楽を一緒に行う他者の存在が大きな意味を持ち、心

理的に大きな影響を与えるとされている。

黒松内町について

黒松内町は、北限のブナの森にいだかれた自然豊かな「田舎」と言われている。この町に暮らす人々は「歌才ブナ林」、「清流朱太川」などの恵まれた自然と一緒に暮らしてきた。そして今、ブナの森を愛し訪れるたくさんの人たちと自然と共に暮らす喜びを分かち合いたいと考えている。

また、社会福祉の充実にも力を注ぎ、現在は8つの社会福祉施設を擁するほか全道に先駆けて老人給食サービスや入浴サービス、65歳以上の高齢者の医療費無料化、ホームヘルパー派遣サービスなどを実施、これらの先駆的な取り組みによって、『福祉の町・黒松内』としての評価も定着することとなった。

黒松内の語源はアイヌ語の「クル・マツ・ナイ」に由来するもので、意味としては「和人の女のいる沢」。その昔出稼ぎの漁夫を慕って来た妻たちが、この地で時化に遭い、そのまま滞在したためと言われている。

黒松内町は北海道南西部、後志支庁管内の南端にあり、札幌市と函館市の中間点に位置している。道南における多雪地帯といわれている。町の面積のうち86.6%が森林であり、良質で豊かな緑に囲まれている。

黒松内町は1956(昭和31)年より、社会福祉法人黒松内つくし園とともに、福祉施設の充実を図ってきた。その結果、現在までに8つの社会福祉施設が整い、先駆的な福祉の町としての評価が定着している。21世紀の高齢化社会へ向けて、平成12年5月には新たに介護老人保健施設も開設し、誰もが安心して生活出来る地域の安全を目指して、福祉の輪をますます広がっている。

黒松内町民は、先人のたくましい開拓の心と緑に囲まれた美しい自然を受け継いで、ふるさと黒松内を愛し、世界に向かってはばたくことを願っている。

ここで、黒松内町の4つの教育目標を掲げる。

- 春のぶなのやさしい新芽のように、互いに励まし合って、思いやり豊かなところを育てます。
- 夏の朱太川の川面をよぎる若あゆのように、元気なからだをつくり、生命を尊ぶ心を育てます。
- 秋空の下に広がる緑の牧草地のように、大きな夢をふくらませ、学びつづける心を育てます。
- 冬の吹雪に耐えて立つ黒松内岳のように、厳しさに負けず、努力しつづける強い心を育てます。

地域交流について

平成19年11月に学生たちは、はじめて黒松内町を訪れた。片道4時間の所要時間を有し社会福祉法人黒松内つくし園に到着した。ここでは2カ所の高齢者施設に分かれ、音楽療法実践を行った。2時間という短い滞在時間であったが、学生たちは自分たちが学んでいる音楽が、地域や年齢の差に関係なく受け入れられた満足感は大學生活において貴重な体験となった。

この交流が、できるだけ黒松内町の方々の協力を得て地域交流として受け入れられるように、今年度の計画を立てた。山間に暮らす住民、またのどかなブナ林と温泉を訪れる観光客、黒松内道の駅に立ち寄る旅行者など、気軽に参加できるコンサートと、社会福祉施設の音楽療法実践の準備が進められた。そして、7月に黒松内町長、黒松内つくし園の廣瀬理事長、村田施設長、真宗大谷派開正寺の協力により実現の運びとなった。黒松内町役場の職員は会場設営、音響設備などコンサートの準備を行った。黒松内つくし園は移動の手配、真宗大谷派開正寺は学生の宿泊を引き受けてくれました。



黒松内町ビックバンドコンサート

北海道の初夏の爽やかな風の中、緑の山間を抜け黒松内道の駅に到着した。この道の駅では、旅行雑誌のアンケートで北海道 No1 になったことを記念して、道の駅コンサートを開催することとなった。道の駅前の芝生を舞台に音響、マイク、椅子などが設定された。午後の日差しの中、学生たちの演奏が始まり、黒松内町の谷町長、役場の職員、町民、生の演奏を楽しみにしていた高、中、小学生、通りすがりの旅行者、など 200 余名の聴衆が演奏に耳を傾けました。観客を前に約 1 時間の演奏が終了し、次は夜の開正寺前の駐車場で行われるライトアップコンサートの準備に場所を移した。この会場においても、黒松内青年団のメンバー、役場の職員と町を上げての準備が行われた。午後 7 時、太陽が沈みかけた中、ライトアップされた開正寺の本堂前、ビックバンドがオープニングの曲を演奏しコンサートが始まった。歩いて会場に来る家族づれ、車で駆けつける人々、旅行者など 3 千 2 百人の人口の町で 250 余人の町民が観衆となった。いままであまり親しむことのなかった生のコンサートがこのように身近に行われることに、町民は大きな興味と感心を示していた。



音楽療法実践施設訪問

音楽療法実践は 4 カ所の高齢者施設と 1 カ所の児童養護施設、1 カ所の知的障害者施設で行った。大学で音楽療法を履修している学生 2, 3, 4 年の縦割りでグループを編成にした。近年、核家族や少子化が取り上げられている時、縦割りのグループが学生の社会性や協調性を育てるのに意味があると考えた。実践計画を立てるために学生は多くの時間を費やした。高齢者の中には、加齢とともに機能が衰え、会話ができなくなるが、歌が歌えることがある。人間は生まれてはじめて取得するのはリズムであり、次にメロディー、そして 3 番目はハーモニーと言われている。高齢になって失われるのは、はじめにハーモニー、メロディー、最後にリズムである。施設に入所している高齢者にとって、手でリズムを打ち、メロディーを口ずさむことは、心を満たし、生活に喜びを与える。心身に障害があっても、認知機能が衰えても、生命の質を高めることに音楽は貢献していると考えられる。



宿泊はお寺

黒松内真宗大谷派開正寺から夕食の提供を頂き、黒松内町青年団のメンバー、役場の職員、学生との賑やかな夕食となった。

翌朝は7時30分から開正寺本堂で住職のお勉めと法話を聞き、すがすがしい朝を迎えた。

終わりに

地域交流として行った今回の取り組みは札幌大谷大学の学生にも、また黒松内町の活性化にも多くの貢献が出来たと考える。

コンサートと音楽療法実践を行う前日と終了日に、北海道新聞地方版でこの地域交流を大きく取り扱われた。

学生は、音楽は特定の人のためにあるものではないことを、身をもって知ることが出来た。コンサートホールのみが演奏するところでないこと、生の音楽は人の心をとらえること、音楽はコミュニケーションをとる最大の方法であること、などを実感する機会となり、これから音楽活動を行う学生にとって充実した2日間であった。

黒松内町では、この話題が数カ月続いたと聞いている。この事業がこれからも引き続き行い、地域に定着することを望む。

最後に、道の駅でコンサート中、パトカーが信号無視の乗用車をサイレンを鳴らして追跡中、コンサート会場の前はサイレンを止めて追跡したとの話を付け加えておく。

黒松内町谷口 徹町長

黒松内町は、人口3,200人の酪農を基幹産業とした町で、また福祉の町として福祉職員および職員家族数を入れると、総人口の約1/3弱が福祉に関わっております。

また、黒松内町は北海道内外からの移住者を積極的に受け入れ、移住者交流も盛んに行っております。

今年、札幌大谷大学では地域音楽交流コンサートとして、音楽学部の学生50名が当黒松内町を訪れ、町民ならびに施設入所児・者の音楽交流を行ったところでございます。プログラムの一環として、道内外の観光の接点であります道の駅でのコンサートが好評を呼び、ツーリング、自家用、キャンピングカーおよび地元の方々との音楽を通しての交流も行われ、大変有意義な取組であったと考えているところでございます。

この取組を恒常的に行い、町民各位が音楽を通して地域交流を行い、ひいては旅行者との豊かな交流ができれば、幸いに存じます。

社会福祉法人黒松内つくし園 廣瀬清蔵理事長

社会福祉法人黒松内つくし園は、児童養護施設を開設して52年を経過し、現在、保育所、児童養護施設をはじめ高齢者、知的障害児(者)、身体障害者施設など33事業所抱え、職員数320余名の社会福祉法人です。

今年、札幌大谷大学では地域音楽交流コンサートとして、音楽学部の学生50名が当黒松内町を訪れ、施設入所児・者に対しては、音楽療法を展開し、音楽の与える効果というものを存分に披露させていただきました。

この音楽のもつ力を福祉対象者に恒常的に取り組んでいただければ幸甚に存じます。



まとめ

北海道の地域に根ざした大学として、この研修は人と人の繋がりを大切にする意味で有意義な研修であったと考える。音楽を学んでいる学生が音楽の意味、音楽の活用方法、音楽の効果を考えることが出来る格好の機会であった。来年度もこの研修が行われることを強く望む。